



佛語第一義集

乾

中村俊定文庫
文庫 18
647
1



第一義集自序

心風體乃似諂是あり中い也は無制他者は次
または放肆はありは虚う然はとは免はるはもは忍はぶは勢は者
實はをはとはりはくは實はをは次は中は受はるは化は無は碍
自在はりはるは錢は要はとはとは陸は氏は以はてはくは虚は無は小
課はとはりはるは者はとは責はらはるは并は實はをは叩はてはるはを
亦はとはりはるは我は道はよはりはるは王は代は遠はく
國異はなりはとはりはるは也は賢は者は法は格は言は

非...

古今轍をとおるすすべし其の法は在門外
 いんともある乃輩多くは虚實のさうみ
 物澗々其奥を窺ふ事一紙
 得ん忽自に法理を裏返しにせし
 意しつと終西の義一とあるはつと
 釋せり阿は政経字乃意を兼る
 化民朱俗の一物もさむ一は
 意しつと其もぬく美物よつと

唐のつとる阿は政経字乃意を兼る
 蕉翁の璠章玉句を法辨製す
 たりつとも屬性理よつと
 心を香火つとつと一箇の法心なる
 長集諸家法句各形然つと志久河
 杜(紫)もつと幕かつと法と探る
 あつとつと法意味いそつと理會せ
 ころあつと愚者の一得初心の為

三行 一 一

邪路を塞^{ふせい}く^て正路を開^{ひら}く^ては^なら^ずに^もく^はら^へる^べし^と
又^も系^{けい}の相^あ換^かひ^を多^くく^はら^へる^べし^と伏^ひて^は識^し者^のの^唯者^の
類^るを^とく^は侍^まる^をも^くは^らへ^るべ^しと^も唯^の者^の
天^{てん}の^の葵^{あひ}お^のけ^と〜^と仲^なる^半瓢^{ひょう}子^の之^の力^{りき}百^{ひゃく}拜^{はい}



俳諧正風體鼻祖



芭蕉桃青翁肖像



佛語第一義集之乾

鼻中庵三力著

意馬心猿



元日や猿々々着々々々々猿々々々

コノ意の馬ノ塵乃境ノ境ノ心ノ猿ノ五濁ノの岐ノたりノ念ノ
アイツ相續ハしてハ朝ノ昏ノやむハ時ヲ多ク人ノ終ハるヲ終ハるヲ免ル事ナらズ。
ミチ身ノ道ヲを行フ。魚ノハ魚ノ乃ハ乃ハ行フ。志ハ志ハとハ跟ハ。
サレ猿ハ猿ノ形ノをカばウ。人ノノハ人ノ道ヲをス。で
サレあハ猿ノ猿ノ形ノ面ヲをウキキせツ。一ノ統ヲ於テるヲを知。以テ
モ孟ノ子ノノハ所謂ハ仁ハ人ノノハ心ノ也ノ義ハ人ノ終ハ路也



其路を舎て由ず其心は放りて求るあはれをばとて
 道理を人より元日とてまゝ一日ふ影を山井。その心は
 風起よは少人もまゝなま智ふてさう。その心を一瞬の間か
 半らまらまら羅刹象よは移移るていふ。まゝとてくは
 清きふ塵想をばばばら改むて。やうく物我ふがなれ
 あらね馬よ馬の面をまら。心の様ふ様の面をすまら
 生涯を強なる人の謂たる。此念を想須臾も間断かたれ
 どもなまの人は年やとて亦まら。是をて一箇の方便よ
 ちて年と思は月。月と思は日。日と思は
 時。刻ふは是は改む様面をまら。理は一也とていふ

唯え百とてまら。一念様察は意味深なるあを家ある
 面は様を拂ふや。花のまら 山風雪
 此様片時も身を離さず。是又はまら神。四海一様
 名は様。水の音まら。心は様。様を拂
 まで改ふ。身は上の様を拂ふ。あはれ。あはれ。あはれ
 さ様。ぐとて様。の面。脱。様。あはれ。面。皮。まら。まら。まら
 業よはら。て。落。球。を。ぬ。む。ぐ。ぐ。ぐ。我。兢。く。て。弱。て。大。乃。を
 作。は。ま。あ。ぬ。れ。我。は。ま。ら。ん。と。ぬ。ま

本来面目

侍や〜〜安小似〜今朝始事

世は〜〜知りぬ。初もハ世は塵埃とまぬ色春村同一

なるぐおのよ魚は着るは心外。然る体衣毛りより

宵少袖を捲り〜舞柳投棄て若きけり〜にほひ

斯く〜〜わも〜我も誰や〜安小似〜〜〜〜

〜〜〜〜言諸の〜の穿鑿の〜

世は〜〜まぬ〜〜〜の〜

安小袖を〜〜安小似〜〜時よ〜〜

激向。物も准〜〜依借の一曲〜〜深長の程なり。其

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

准〜小涙〜肝心の餘情〜〜幸以白の〜

う〜〜〜〜〜。趣意を〜〜

歌〜人や吉歌不。掲〜ぬ井小海〜ぬ水の流〜〜

ちも〜〜人〜〜〜〜〜。我は〜〜

繪〜〜〜〜四方は〜〜を〜〜誠〜〜

た〜〜〜〜。一休禪師の面目〜〜

〜〜符令〜〜留是真理は〜〜毎玉の主を〜

佛文殊〜〜言無心無念は本佛ハ不思議を〜

本去来なり〜〜血有〜〜也〜〜

〜〜如無〜〜物を〜〜。此が味を會得せ〜

依諸や^{イカレ}て古人の糟粕^{ヅボク}のも輪扇^{リンセン}識^シと受^{ウケ}る一唯^タ何^{ナニ}か
惟^レや^ハ好^ホ愛^{アイ}言^{ゴン}を名^シを^シは^ハる。句^ク中^{チュウ}の一^{イチ}物^{モノ}も^モ有^{アル}れど^ド
一物^{イチモノ}ら^ラう^ウこ^コに^ニ言^フく^クめ^クと^トん^ンふ

其角

是^{コレ}即^シ也^{ナリ}相^{サウ}を^オも^シて^ス一^{イツ}辞^ジの^イ味^ミに^ニ
こ^コれ^レを^レ仁^ニら^ラひ^ハ。智^チ者^{シャ}は^ハこ^コれ^レを^レ知^チて^ス
か^カり^レれ^ドも^モ至^シ妙^{ミョウ}の^ノ心^{シン}は^ハ同^{ドウ}一^{イツ}の^ノ心^{シン}に^ニ
榮^チ耀^{ヨウ}の^ノ屬^ノを^オも^シて^ス人^ニも^モす^ス。我^ガ朝^{チヨウ}を^オも^シて^ス
申^メ奉^{ホウ}の^ノ神^{シノ}の^ノ身^ミ代^{ダイ}より^{ヨリ}傳^{デン}ら^ラう^ウ一^{イツ}年^{ネン}一^{イツ}文^{モン}。聖^{セイ}德^{トク}上^ノの^ノ身^ミ
と^トい^ハす^ス。善^{アヲ}く^ク四^シ海^{カイ}を^オも^シて^ス一^{イツ}身^ミも^モあ^リて^ス。

鄙^ヒ夫^フの^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス。教^{ケウ}を^オも^シて^ス。依^イ諸^{シヨ}や^ハ
頑^{カン}愚^ウなる^ノ蒼^{ソウ}生^{セイ}は^ハ心^{シン}を^オも^シて^ス。道^{ドウ}の^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス
海^{カイ}國^{クニ}の^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス。公^{コウ}が^ノ日^{ニチ}世^セ人^{ジン}詞^ジの^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス
道^{ドウ}を^オも^シて^ス。天^{テン}地^チを^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス
名^ナを^オも^シて^ス。名^ナを^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス
心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス
連^{レン}俳^{ハイ}よ^リに^ニ榮^チ耀^{ヨウ}の^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス
鬼^キの^ノ神^{シノ}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス
了^{リョウ}の^ノ心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス。心^{シン}を^オも^シて^ス

非^ヒ也^{ナリ}一^{イツ}義^ギ集^{シュ}一^{イツ}卷^{クワン}三^{サン}七^{シチ}

言終道を考ひて則その違ざるふをいへん僧釈をも
可く考ふ時々三毒をわたりて害を振く嫌く人欲唯
よく心を用ひて用ひざるふ有らば猶儒道ハ儒者より
換ひ佛道ハ佛者よりみざるべしなんんて先言
あつたかふふぞ

目前分明

人をもえぬまや、後法うらの梅

此句さぬく説ありともども皆を穩當なるべしん
易に良其背不獲其身行其庭不見其人無咎といふが

ぬ一逆思録存養類程子曰人の其止るふ安んぬる能
ざる所以の者ハ欲の動ざる欲前を牽て其止るふを求む
るも得べし故に良の道當り其背を良と見ざる所
前を存りて背ハ乃らざる是れ見ざる所
止る則ハ欲を其心を乱さずして止るる乃安
不獲其身とは其身を止るる我を忘るるなり
我るる則ハ止る我るる能ざる止るる能く道
とて此後の背の悔も他人の背はなり。背は一時
をたて立たず。いとも少くも私慮をうら
むる小徳もゆる級よを背を良と見ざるおびそのふ

つぎつぎと身なりを知らずと見の足らざる見
 見よらざるも其の意不修其人を足らざる見ざる
 所少の心乱るなり。其の良智を修め
 ちがう見解を著し鏡背の梅より止る能はず。これ
 即ち五蘊の魔魅にほくらぬの外。他もあつて
 んどるなり。蓋は古語よりおれおせる一章の
 唯の意は符令なる心でさる。釋す是は先ん
 所の謂なり。後の面よりつる。其の後を足らざる。又さるも
 そらるるもつけざる。是亦所詮なり。

ある時結新や鏡や帯一は心 支考

躬つる名形は去る鏡中少止る。其の性も喩へた
 了。嬰子の跡を又ありやと花より。心をもさるる
 花はちるる。鏡よりつる。誠は電光石火のぶら
 観念して死生一如の甚深微妙をさるる。躬は
 ありと書る。猶もさるるを不立文字。其の上の文学は
 達する。博學多聞君と教ふる。文質彬彬も
 るは學問の力なり。真理をたるる見性の力なり。此二
 のお兼備して能行心を聖賢ともさるる。別
 聖人佛もさるる異なり。今も聖人あり。其の
 ちん。心を知る人のさるる。心を知る人あり。

安ら瀨を人よ愛つよかたはな

山雪

負つよ子も越つらう世倍は意味あり安ら瀨と後乃
梅のどく一人を愛つよハ眼を閉せよと是即誠者如
一言ありも天の道なり心誠よすも人の道あり
之の中庸の意も合つ思合つ一爰其角鹿堂野坡
支考多行句法列て其行つよ一哉峯も條も事無つよ
替る原都々無名の句ハ祖翁と知つよ

道之大原出天

う一野あり橋見えそ橋本を

天地々物を生るとつ心成生る所のお国をのこる地
生物の心を得てつ心成。故よ美物一所よ最妙本
鳥獣ハ大形心成を受ざる也草木ハ逆生とて逆よ由
牛根ハ頭より枝ハ尾より。多穀ハ横生とて横よ由
横よつらく物ハ心もあつ其心成つらく物を成る事
急り多し。人心成を受て専ら生る美物も逆よ由
あり。故よ美物成る事つらきも。後乃此道理を時一途乃
用をも作らざるも美物成る事つらきも。此ハ目見難し乃
調成らざるも天地造化の一物なり。我物つらざるも
知りて造らざるも天地造化の事つらきも。此ハ目見難し乃

佛のめし能詞いづく今如詞俗語と曰ふ亦ハ民間の弄
 びなり倍語と一槩いふ言語流るる後世より今如
 倍語も耳辨ざる所ハ又さしとんやそれハ妄計の沙
 汰なり既子禅論ハ唐土の倍語を以て書り。如き是を
 倍語ハ俗談もいふ人多し奈何子曰小子聽之清斯濯
 纓濁斯濯足と云小童はうふ歌を以て道中庸
 令くうとあひ色雀の云俗語ハ重なる語をさす時
 うらゝ花は倍り用ひ侍らる先規なりと云ふも符合せり。
 時ふらうとわくハ則天理のつらひと云ふと云ふも各々雜
 言なり見識をさすてやハ俗語ハ仍あるべし

不老不死

兼好の書や志長は古見佛連

古く佛ハ古曆終るる一蘇抹のまじりて又支人其間
 なるに佛ハ新古終るるも形は物にて地の造化
 して古佛ハさる物なり。趙州の語ハ金佛ハ海
 本佛火を海を以て佛水を渡らすと云ふ。形は火と云ふ
 形は火と云ふは滅と云ふは古く佛連の身
 之も其名の如くも又回祿ハ滅と云ふも何
 やと云ふや菊の千歳の名ありて也。代りては

其香のつらき香はくは目ふくは次其目ふくはさう所と天
 とし神も佛も説き了らば故は白くは佛像の滅する
 期は山も草も枯れあはれは心と不生不
 滅は佛性よきもくはくは古き佛をさうり
 せは其言味ふ詞たさうやふ侍も性身セイタマの句格ち
 多し勢はさうしりさうさうはくは譬タトヘは莊子サウジは天地
 一指万物一馬イツレバンモツイチバさうりさう馬陽ヤマ冬フユはくは常はさうり
 わさうりはくはさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 且測めは法ホウなすは琴コトは松マツは吟ウタは来キ中の趣ソウとさうりさうり
 こも其妙音ミョウオンはさうりさうりさうりさうりさうりさうり

時を思ひ出せり時々さうりさうりさうりさうりさうりさうり
 出まはさうり古佛コブツのち味ホシ取ミるは一期イチキはくは性セイは目メは
 又マタはくは若ニヤクはくは若ニヤクはくは若ニヤクはくは若ニヤクはくは若ニヤク

琥珀珀玉の香はなき 聖坡

ゆりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 ちさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 ちさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 其香カもさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 哉カとのさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
 とちさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり

無示無識諸問答をくまなくしつゝと此微意ははる
子又もくをた事なりと

通身無影像

丈六の如くはたし高し石法上

阿波莊新大佛とて之を寫跡とてむかき石臺を親実
くたつ袂言ハ樹下石上とて之を寫を記死玉ハ樹下といふ
石上といふはたし初より丈六といふ佛法をけしき陽冬
とは佛性論にあらはる。是丈六詞不著。本性ハ野馬湯
中結ぶるものあらんと。當てく思之。次有とてあらはる

有の見よと云ふ事思入は無結又よおつ。是世人一般の通病
なり。正風の能治ははる味一大事なりと執向をて執向
小者を以曲節とて。世を以て名をた。唯志はる通を
有法修むとて入内の中小意味あり古語一技の字を
拈起とて丈六の法金身とてはる。理屈をてはる。是
考下此丈六は是無量の丈六は陽冬ハ是無邊乃
かる。石の上とて不変法道場且能治の縁語なり
斯法とて教侍見ハ。おこし海くむは道法道群
白ハ皆以て禪言ふらる。あななり。衆人の日禪。あな
見性成佛と示。あなも念仏宗ハ。はる。法。同

佛法フツホウふふ斯カク然カクび〜〜ま〜〜ハク佛カイ智カイはふふ成ケ了ケ。答コタヘて曰イハ
 念佛ニブツ宗シユ其ソノ法ホウ也ナリ。入ニツ我ガ我ガ入ニツ機キ法ホウ一イツ種シュと云イハ
 るふら〜すや。天台テウタイ止シ觀カン真シン言ゴン法ホウ阿ア字ジ本ホン不フ生シヤウ花ケ嚴ゲン法ホウ之シ界カイ
 唯一ユイイツ心シン或シ志シヤウ多タ法ホウ一イツ心シン一イツ向キヤウ日ニチ蓮レンの妙メウ法ホウも亦モ有アるま〜〜ニ耶ヤ
 法ホツ性セウを悟サトらぬ外ソノも有アらぬ。今イマ誦ソク宗シユ法ホウ講コウ談タンは
 ろは石イシ可カ得トクの説セツこは不可シ思議ギの説セツも。肝カン心シンの意イ
 味ミをば除ノクくま〜。た〜〜と〜〜と説トキふ所所を實ジツふ〜ニ導ドウ師シももに本ホン然ゼン理リももは唯タビ經キヤウ文モンの字ジの美ミの稱ショウと
 日ニチを〜〜の聲セイも〜。故ユヘに佛ブツ法ホウは〜〜更サテに神ジンを儒ニウ道ドウも修シユする
 小人コジンの思シへる也ナリ。佛ブツ法ホウは〜〜更サテに神ジンを儒ニウ道ドウも修シユする

所ホ本ン性セイよか〜〜ら然ゼンん者ヤの姿サマへり詩シ歌カ連レン俳ハイもは感カン
 意イとわ〜〜さ〜〜ら〜〜ら妄マダ語ゴよは〜〜ら已スデに祥ゼン意イの〜
 ま〜〜知チずんハ忽タチ然ゼン然ゼンが句クハ敏ダク〜〜は依イ認ニョウも感カン〜
 依イ認ニョウも醒サムる〜。古コ人ジンの姿サマへり連レン身シンハ半ハン字ジ經キヤウの〜
 色シキ相サウ方ホウ便ベン〜。依イ認ニョウハ滿マン字ジ經キヤウ如ニ〜。志シ也ナリ實ジツ相サウ中チュウ也ナリ
 なり〜〜ら。中チュウ身シン一イツ辨ベンも是シ非ヒ連レン佛ブツと名ナ結ケツかりるもは有アり
 別ワカ時トキハ斯カク然カク〜。性セイ身シンの句クハ蘇ソも少シウく唯タビは火カ意イを
 知チり得トクらぬ〜。理リもあ〜〜ら〜。〜
 そ結ケツ信シンの道ドウ不フ通ツウ〜。心シン糖ドウ粒リツを〜。向キヤウよは〜。後カチハ者ヤ
 家カチ法ホウも〜。〜。金カネも火カを以ヨリて識チ人ジンの言ゴンと〜

試む先言最恥ぶ。そとちて頓悟の華道躬の
白紙ふ風雅と奪はれん。汝は口惜し伽路を。ん
うのほああり。うはむ性理をも派をう。次理濟事
濟もく嫌う。そをば能くあう。かゝるう。そ。わ
まむ。聰明。智。守。之。以。愚。も。ま。ま。

天地同根

命ゆへに中へ活くる様うぬ

大仙寺ゆく土芳小達や。詞書はる先ッ芭蕉と土芳
こ。ま。り。に。庭。前。乃。様。と。ゆ。は。は。の。命。う。ら。り。や。り。や。

我いのら終二つともはらひど二人の心をこめて二つと
なれども度か肝要なり聖人乃一貫も神道の唯一も
他事於一。維令二人ハ十人とも命ハ性也一也。體用と別
時ハ性を解す。生滅なり。命を用の。動と静と
ん。も。總。て。ま。は。ら。の。物。なり。物。は。自。依。を。こ。ら。り。命
ゆへに。こ。ら。ハ。い。ふ。ん。と。ま。は。ら。る。是。佛。法。の。處。を
し。も。實。ハ。こ。ら。二。つ。は。死。物。を。こ。ら。り。中。を。活。く。様。と。ん
ゆへに。井。ふ。た。ま。う。ぬ。あ。ら。は。波。を。ら。て。新。も。か。こ。ら。も。た。り。ま
ん。も。こ。ら。い。ふ。古。の。心。を。こ。ら。二人。を。こ。ら。す。其。中。一。は
活。も。せ。ぬ。様。を。忽。活。さ。り。ゆ。は。死。此。様。も。又。候。の。一。は。こ。ら

うらや他人念ぬくま入一也。其阿ハ唯猫の夢のまのて我
 かる山を園と那。又を猫の夢やある時園の月不園
 目ふかきこゝ忽猫の声ハ思き目て見る。目もか何もさ
 唯月のまの古語小間不容髪とさるや。其心は間ハ
 髪もいまの髪と波と思ひさるハ思て思葉分
 かり月潭庭を雲と水の痕かこりて思
 かり其心の深る所思惟と一

そややまきし流るり母結身

野坡

端的の意思同一なり。其馬の馬ハ目赤小思さるまき
 流子不園つる思愛の心よ其の夢ハ止らぬ前在る

すハ忽馬とて後在り世自性ハもいさるん

無相真形

伊や妹也いり流く月結友

大和物流る小信濃の國更級の雲小住む男娘を巻ん
 親のやふかづれハ女房はくく惜きて思きさづらさ
 吾免娘は流る思く流る思く此男かきり思く思
 一お月もあつて被さるる我ら思く思く思く思く思
 妹は思く思く思く思く思く思く思く思く思く思
 思く思く思く思く思く思く思く思く思く思く思

かり帯〜。空〜。光景を透り〜。お驚れ無事と致るハ
 此人の帯〜。此湖の形と修と修と致るハ
 誠ニ性徳大なり哉大海と指さす人必も可る妙句ニ
 了る思ひ合と〜。芭蕉語然〜。湖を眺め何ぞ也
 相をわんや。其其何様。此性ハ湖水一面より他をなく
 無我寧ろわんや。此語をいん〜。此の人ハ。湖水
 一面より〜。主人公をさす〜。其妙ハ此れを悟るより
 彼〜。心もわんやと湖の一面ハ融通する主人公の悟と
 あり〜。趣向を求めた所の名や也。此は人の心より
 湖の形なり句句〜。此の心ハ此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。

おひもあ〜。此の湖を透り見の人必も可る妙句ニ
 主人公と主人公と。面目坊〜。此の理應の妙句ニ
 あり〜。故何となく。近江の人〜。此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。

孔子のよま存〜。遊者ハ斯の如〜。吾れを人さす〜。の心
 一〜。四時の変化も人の身も須臾も歩級。此れ流水ニ
 古人の心もな〜。四時亦〜。人老〜。此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。

此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。此の心と〜。

又我相の^{ガサウ}と^{ソノニシシ}其肉身を^{カクシヒ}火と^ヒも水と^{ミヅ}入ても
 熱^{アツ}う^ツや^ツ冷^ツや^ツか^ツや^ツと^ツ火と^ヒ水と^{ミヅ}づ^ツ熱^{アツ}と^ツ冷^ツと^ツい^ツは
 あ^ツと^ツば^ツう^ツ冷^ツと^ツた^ツら^ツい^ツは^ツ其^ツあ^ツつ^ツと^ツ知^ツつ^ツ火^ツと^ツ冷^ツと^ツ知^ツ
 る^ツが^ツ即^ツ性^ツの^ツ働^ツと^ツあ^ツい^ツは^ツ唯^ツを^ツ付^ツハ^ツ熱^ツと^ツ冷^ツと^ツの^ツ外^ツは^ツな^ツ
 か^ツ多^ツし^ツが^ツ我^ツ形^ツハ^ツ死^ツお^ツは^ツし^ツは^ツ妙^ツ境^ツハ^ツ識^ツ得^ツの^ツ君^ツ子^ツと^ツて^ツハ
 物^ツハ^ツい^ツれ^ツづ^ツ。佛^ツハ^ツ向^ツて^ツ向^ツふ^ツ佛^ツの^ツい^ツれ^ツ何^ツれ^ツ思^ツ案^ツと^ツも^ツなく
 核^ツ法^ツで^ツ解^ツさ^ツう^ツ。然^ツば^ツ鬼^ツハ^ツ向^ツて^ツ即^ツ心^ツ鬼^ツハ^ツ井^ツ中^ツハ^ツ向^ツて^ツ井^ツ中^ツ乃
 あ^ツは^ツも^ツ又^ツ廻^ツ廊^ツより^ツ明^ツ松^ツと^ツつ^ツま^ツ。堂^ツは^ツ肉^ツ陣^ツハ^ツ入^ツる^ツ時^ツハ
 を^ツの^ツく^ツ暗^ツ松^ツの^ツ火^ツの^ツい^ツれ^ツ我^ツ相^ツハ^ツな^ツし^ツ。斯^ツれ^ツど^ツ死^ツの^ツ本^ツ性^ツは
 な^ツも^ツ不^ツ動^ツ不^ツ変^ツと^ツも^ツ説^ツさ^ツう^ツ。火^ツも^ツ焼^ツく^ツ。水^ツも^ツ沸^ツき^ツぶ^ツる^ツふ

ら^ツも^ツや^ツお^ツ水^ツ取^ツハ^ツ若^ツ狭^ツの^ツ井^ツな^ツり^ツ。堂^ツより^ツ隔^ツて^ツか^ツら^ツふ^ツら^ツ音^ツ乃
 言^ツは^ツ肉^ツ陣^ツハ^ツ今^ツの^ツま^ツも^ツ。此^ツ智^ツは^ツ音^ツハ^ツ達^ツ陀^ツの^ツ心^ツの^ツ秘^ツす^ツ也
 蓋^ツ当^ツは^ツ音^ツと^ツも^ツ元^ツ是^ツ空^ツ音^ツな^ツり^ツ其^ツ空^ツ音^ツを^ツ観^ツる^ツ時^ツハ
 即^ツ今^ツと^ツ然^ツく^ツ。観^ツ音^ツお^ツり^ツは^ツ所^ツ考^ツべ^ツし^ツ。お^ツ水^ツも^ツや^ツ氷^ツ乃
 佛^ツと^ツら^ツも^ツも^ツ。若^ツ狭^ツの^ツ井^ツか^ツら^ツ音^ツハ^ツ肉^ツ陣^ツな^ツり^ツと
 一^ツ句^ツ破^ツら^ツる^ツや^ツふ^ツか^ツら^ツは^ツ所^ツあ^ツら^ツる^ツべ^ツし^ツ。水^ツと^ツら^ツる^ツ時^ツハ
 一^ツ片^ツの^ツ氷^ツ心^ツと^ツら^ツる^ツ衆^ツ徒^ツの^ツ忽^ツ履^ツは^ツ音^ツと^ツも^ツな^ツり^ツも^ツ。其
 井^ツ中^ツハ^ツ少^ツる^ツ念^ツ相^ツハ^ツ何^ツれ^ツ今^ツハ^ツを^ツ然^ツく^ツ。夢^ツの^ツ音^ツの^ツい^ツれ^ツなり^ツ
 と^ツ無^ツ我^ツ實^ツ相^ツの^ツ形^ツを^ツと^ツら^ツる^ツ氷^ツ面^ツ鏡^ツと^ツら^ツる^ツ心^ツの^ツ痕^ツな^ツり^ツと^ツら^ツる^ツ
 む^ツ將^ツど^ツと^ツ相^ツと^ツ誰^ツと^ツも^ツは^ツ法^ツは^ツ知^ツる^ツや^ツと^ツら^ツる^ツと^ツら^ツる^ツなり^ツ。いと

凄冷しくもくくれ

金剛正眼蓮乾坤

観多結毫えやり川羨の雲

花帯うもけり。あては。抱朴子も云遠をまひをそふ
影も人の常情耳ふ信不疑六倍結恒教さう
らや此句如妙所、観方を圓通も号そ観念なり
覺えり川とは。慮るなり。花の雲といふ自由り存不
懈く所の天心なり。たて物を観て。つゆ何。深し法
奥妙。解のるも君あがり。すく。松崎の風系もみりたり

花盛りも直よえ。直よえ。是とあり。受得る所の観
音力なり。以佛力を見ふ。ゆふ。出罪。多象うつと
え。つなり。世道理を。観自在善薩も。観たり

観るも身をほへ。ほへ。ほへ。其用

是則圓通なり。観音堂て。身捨て。身をほへ。せうふ
つ。次。思。合きて。存せ。或僧の曰。観音。ハ。過。去。佛。ハ
圓通。ハ。は。渾。然。ハ。一。心。ハ。同。意。ハ。心。ハ。一。心。ハ。非。ず。り。か。も
答て。曰。予。傳。聞。所。一。佛。なり。と。あ。り。て。は。此。渾。然。ハ
つ。は。天。理。なり。我。れ。は。衣。ハ。渾。然。ハ。一。物。なり。と。わ
ぬ。が。つ。渾。然。ハ。多。道。ハ。行。て。若。く。是。圓。の。や。一。以。て。し。は。せ

貫心其炭固の中もゆゑ盡て一渾然なる一物美物よ
 通ずるが故に國通とはなる感へし心外執着なきを
 一心を我も元満く執自在なるを十一面千手を眼も
 説きたるが如く過る諸佛は心法異名なるべし
 竹を離して別佛ありあやうく画餅を食ふ事なき
 六祖壇經より曰分一切法為外塵相金剛經より曰法猶可
 捨何況非法と又六度法其心より法華と云うる者
 きて塵刹なるべし丹霞の念佛徳山燒經に心と云ふ者
 も物をわきまをこころ成佛とておのれを信ふ
 心居する人戲まて云何某は心竹の詩教に於て

兼好法師靈夢より云末席より心も種あり一法を
 押へて之を我生前も何れも吟後然るまふ書
 けしめる物もさう意味深く説けるまふりさしある
 うゝと然る芭蕉の翁もさる修尼曰わくはくはく
 何れも曰いふも其の意を感へ識者ハ之を妙い詞何心
 ぬく物もさる自然なりゆあり道徳を合せしむ
 事なり故に真理より引合する心を講釋す所は孔孟
 佛氏の金言も多岐遠くもあつて元來古今同一人情
 たりとも無識の人ハ之を物とて之を境と
 為しあやう似するもの似たるは是なるものハ是なるべし

即今は一章之も浮きり是又管見の現也一其の
 なるは思ひのけを淫華會のそをきりてふまはた
 ざらむそく秘えん像はらうのては像のまゝ眼と
 右つとも足茶多波のこい遊ばす元是何某は
 もも肉服をて空観ふ注評あるは地のりよ
 あり一性神の句解ありては尋常をて海を測り
 及んいふも神をて佛法をてててててててて
 經を淫華とすのまをてててててててててて
 ちのまもて向めん候神教傳道とててててて
 ありててててててててててててててててて

後行すなり免之をてててててててててて
 影の像はたててててててててててててて
 是で時所のまへ異なりてててててててて
 今之るのててててててててててててて
 此天本分めりててててててててててて
 識す神通者ハ佛者とてててててててて
 皆是前よりてててててててててててて
 天徳を纏てててててててててててて
 誰うゆる阿戸口よりてててててててて
 孔子宣ててててててててててててて

非若第一類集 卷

二五二

徳化を家^{カウム}くもくも^{ホトケ}なる。佛^{ホトケ}の世を立^{ケニセウ}て見性^ゲ解^ゲ
 脱^{ダツ}然^{シヤク}法^{ホフ}を示^シす。度^{ヒロク}くも情^{シヤク}每^{ヒヤク}情^{シヤク}草^{ソウ}本^{ホン}國^{クニ}主^{シュ}よる^ルも^モ
 皆^{カイ}俱^ク成^{セイ}佛^{フツ}の化^ケ度^ドあ^アつ^ツく^クざ^ザら^ラぬ^ヌも^モ。神道^{カミチ}ハ我^ワ口^コ
 の王^{オウ}法^{ホフ}め^メす

皇^{スラキ}統^{テイ}神^{シン}統^{トウ}天^{テン}と^トも^モふ^フが^ガ一^{イツ}王^{オウ}世^{セイ}美^ミ國^{クニ}又^{マタ}顔^{ガン}ひ^ヒか^カ
 誠^{セイ}直^{チク}清^{セイ}潔^{ケツ}然^{シヤク}る^ル天^{テン}系^{ケイ}よ^ヨも^モつ^ツた^タ心^{シン}法^{ホフ}淨^{ジヤク}禪^{ゼン}を^ヲ撰^{セン}て^テ安^{アン}と^ト
 念^{ネン}も^モ不^フ思^シ淨^{ジヤク}よ^ヨ浴^{ヨク}を^ヲお^オあ^アる^ル最^{モトモ}ソ^ソノ^ノミ^ミチ^チ
 穢^{シヨク}處^{トコロ}人^{ヒト}混^{コン}ず^ズる^ルは^ハも^モ即^{ソク}今^{イマ}異^イ國^{クニ}の^ノ教^{キヤウ}法^{ホフ}は^ハ憲^{ケン}と^ト佛^{フツ}
 者^{シヤ}俗^{ソク}も^モ吾^ワ躬^{コウ}の^ノ蒼^{ソウ}生^{セイ}あ^アる^ルす^スや^ヤ然^{シヤク}る^ルを^ヲさ^サが^ガら^ラふ^フ儀^ギり^リあ^アる^ル
 ハ^ハ嗚^ウ呼^フ何^{ナニ}ぞ^ゾや^ヤ元^{ゲン}來^{ライ}天^{テン}心^{シン}の^ノま^マな^ナる^ルを^ヲ神^{カミ}と^トも^モ佛^{フツ}と^トも^モ聖^{セイ}

人^{ヒト}と^トも^モ其^{ソノ}本^{ホン}ま^マた^タ以^ヨ自^ジ性^{セイ}を^ヲ養^{ヤウ}り^リ涅^{ニヤク}槃^{パン}と^トも^モ般^{バン}若^{ニヤク}少^{ショウ}の^ノい^イ
 善^{ゼン}提^{テイ}こ^コら^ラ。佛^{フツ}も^モ明^{メイ}徳^{トク}と^トも^モ神^{カミ}を^ヲも^モ自^ジ己^コの^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ
 け^ケり^リ相^{サウ}も^モい^イを^ヲ離^リる^ルも^モ知^チる^ルも^モあ^アる^ル不^フ滅^{メツ}と^トも^モ滅^{メツ}と^トも^モ
 宗^{ソウ}て^テ無^ムを^ヲ善^{ゼン}佛^{フツ}と^ト稱^{シヤウ}号^{ガウ}す^ス。然^{シヤク}れ^レも^モ佛^{フツ}も^モ自^ジ己^コの^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ
 取^{シユ}捨^{シヤ}の^ノ見^{ケン}い^イも^モ滅^{メツ}と^トも^モ生^{シヤク}滅^{メツ}の^ノ見^{ケン}い^イも^モ生^{シヤク}滅^{メツ}の^ノ見^{ケン}い^イも^モ生^{シヤク}滅^{メツ}の^ノ見^{ケン}い^イも^モ
 況^{キヤク}も^モ。さ^サら^ラに^ニ涅^{ニヤク}槃^{パン}像^{ゾウ}と^トも^モ空^{クウ}壳^{カク}と^トも^モ像^{ゾウ}と^トも^モ
 事^{コト}小^{コウ}ら^ラし^シ。世^セ尊^{ソン}以^ヨ入^{ニク}滅^{メツ}し^シも^モ涅^{ニヤク}槃^{パン}と^トも^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ
 殆^{ホト}思^シら^ラず^ズ。涅^{ニヤク}槃^{パン}も^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ
 手^テ道^{ダウ}を^ヲち^チり^リし^シ人^{ヒト}の^ノ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ
 は^ハ所^{ショ}得^{トク}く^ク者^{シヤ}也^デ。目^メも^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ心^{シン}の^ノ善^{ゼン}を^ヲ神^{カミ}と^トも^モ

伊部集第一義集 卷

(二十四)

くるはらぐくあり。神といひ佛といふ元是人なり。そのもと其
 形は地水火風の四天を以てはこころ舎を以てして。舎を以
 滅する期ありといふも自性ハ石瓦石瓦なり。は生滅する。一
 物を以てして名を真空といふ。仁義礼智といふも。是
 等物に體有り用ハ動也。變る物を以てして。蓋は体用ハ動也
 然るに少くして一理有り。爰よ又前物ア如く如く。是も死物
 の脱離して少くはれり。前より少くはれり。自ハ他を以てして
 他も自を以てして。是も死物なり。天候ハ石瓦石瓦なり。死
 後此より少くはれり。是も死物なり。神道ハ自他思應と
 して。是も死物なり。是も死物なり。神道ハ自他思應と

之ハ佛を以てハ入我我入と有り。衆生ハ本性を見失ふハ
 之も少くはれり。世海波の如く。佛神を以てして。是も
 如く。大涅槃は眼を以てして。是も死物なり。神境といふ
 も此意味也。天照太神宜くは宝鏡を視人ハ當格也。是
 視心も少くはれり。日本紀も少くはれり。是も死物なり。是も
 少くはれり。其ハ心法看も少くはれり。是も死物なり。是も
 像を以てして。是も死物なり。方便有り。佛神を以てして。是も
 是も死物なり。是も死物なり。佛神を以てして。是も死物なり。是も
 大涅槃は二の尊像を知り。故に神境の如く。是も死物なり。是も
 神を以てして。是も死物なり。是も死物なり。是も死物なり。是も

外宮に館をも。初書は鬼も角もつれ。金井に神さす。
 對しある一章はあつた。心か穿鑿は及ぶる。
 一句の字條とて。神地六即今人。身は具し。
 四大なり。涅槃とは生ある。これを合せ。
 此四大は修し。結一物あり。生滅は。
 生不滅なり。これを神地結う。神君も心は。
 なり。思ひも。心は。心は。心は。
 像とは思ひも。心は。心は。心は。
 面は。思ひも。心は。心は。心は。
 心は。思ひも。心は。心は。心は。

和なり。志理の微意。言分を。考ふる。
 道神の句は。論が。六根は。
 神物なり。心は。神明の本。
 佳趣。言外に。あり。

海棠花 鮮を 怪色 秘し 人 像 其 角

是を。心覚も。心は。心は。心は。
 此涅槃像と。心は。心は。心は。
 心は。心は。心は。心は。心は。
 心は。心は。心は。心は。心は。
 心は。心は。心は。心は。心は。
 心は。心は。心は。心は。心は。

